

[育林第一研究室]B. 省力的育林技術に関する研究： 植栽方式別下刈功程について

宮島, 寛
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

吉良, 今朝芳
九州大学農学部附属演習林 : 教務員

<https://doi.org/10.15017/1456266>

出版情報：演習林研究経過報告．昭和41年度，pp. 95-95，1967-07-10．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



B. 省力的育林技術に関する研究

宮 島 寛
吉 良 今朝 芽

植栽方式別下刈工程について

各植栽方式（正方形植え、水平並木植え、水平列植え、垂直並木植え、垂直列植え、巣植え）別に下刈鎌と刈払機とを使つた場合の作業工程を調査した。その結果は植栽方式別にも、作業法種類間にも有意差のあることが認められた。

まず植栽方式別には巣植え区が最小時間で足り、正方形植えの約30%前後の作業時間であり、ついで垂直列植え、垂直並木植え、水平列植え、水平並木植えの各区間に大きな差がみられず、いずれも50～60%程度の作業時間で足りている。

つぎに下刈鎌と刈払機（クライスカッター2型＝総重量10.5Kg、出力1.5～2.0HP）での比較では、すべての植栽方式で刈払機を用いた場合が長い作業時間を要した。このような結果になつた要因としてはつぎのことが考えられる。

まず第1に作業員のなかに刈払機の使用についてほとんど熟練者がいなかったこと、第2に年齢が30才以上の人で占められ、機械に対する不安を相当もつていたこと、第3に機体がまだまだ重いことなどをあげることができる。

以上の調査結果から機械の導入にあつて考慮すべき点としては、

- (1) 作業員の質の問題を十分検討する必要があること。
- (2) 作業方法を従来の下刈鎌による場合とは異なつた方法を考える必要があること。
- (3) 植栽間隔の検討が必要であること。

などである。